

インジェ大学研修レポート

1MD09065 P

寺田裕作

私はこの度、「インジェ大学医学部との学生交流プログラム」に参加させて頂いたので、そのことについてレポートを書こうと思います。

私は今回のように海外の大学に行き、そこで医学を学ぶ、といったプログラムに参加するのは初めてでした。前々からこういったプログラムに参加している友人などを見て、いいなあ、僕も行ってみたい、とは思っていたのだけれど、今回インジェ大学に行くことでそれが実現しました。

とはいえ正直、参加した理由は「韓国に友達作ったら楽しいだろうな」程度のものであり、それ以上のものはあまり考えていませんでした。しかし行ってみて、こんなに思った以上に考えさせられるものになるとは思ってもいませんでした。

さてプサン（インジェ大学）での日々を振り返って見ます。

今回、インジェ大学で集中的に行ったのが「PBL (Problem-based learning)」です。このPBLでは、患者さんの症状等が紙で配られ、それをもとに「どんな病気が考えうるか」「何を検査すべきか」から始まり診断するところまでを議論するというもので、私には「座学の医学の、すべてを合わせたようなもの」に思えました。

いやしかしこれはいま現在PBLを振り返ってこう思う、というものであって、実際、参加してみると、会話が全て英語。だから、よくわからない。いや、そんなものではない、からっきし、何をしているのか、何がしたいのかすらまったく分かりませんでした、初めは。「vigilance」って？「EKG」って？「Burning sensation osmolality」って？そんな単語が出てくるたびに、同じ班の横手だとか隣のインジェ大のサンゴンらに聞く始末で、その調子だから、からっきしだめ！

しかしPBLも3日目くらいになるとだんだんと何やってるかくらいまでは分かるようにはなって行きました。GFR、クレアチニン、MCV…臨床検査医学でやったことばかりだ。あの科目がいかに大事だったかが身にしみる、、、、。

とはいえPBLは3日間だけ。結局、何をしてるか分かった程度であり、結局何もわからなかった、とも言えます。

しかしこの何も分からなかった、ということは酷く私にショックでした。医学の知識が大幅に欠けている私ではあったが、しかしせめてPBL中の医学英語でない英語くらいは、理解できるだろうとタカをくくっていたからです。インジェ大学の学生は、みな英語がほんとうによくできる。まるで英語圏の人間の様だ、と思ったらやはり何年かアメリカに住んでいた経験がある人たちばかりで本当にすごい、と感じました。あまりにみんな留学経験があるものだから、インジェ大学の医学部学生はそんなに家庭が裕福な人が多いのか、

とまで思ってしまいました。

以上がPBLについてだけれど、インジェでやったのはこれだけではありません。PBLが終わったあと、学生のみんが次々に「今日はどんな予定があるの？飲みに行こう！！」と誘ってくれます。本当にいろんなひとから誘ってもらえるので、歓迎してくれているんだな、と心から感じました。飲み会は英語だが、しかし英語がうまく伝わらない時であっても飲み会のテンションでどうにかなるようです。お酒をたくさん飲むことはある意味楽しいことではなかったのですが、とにかく、釜山での毎日はそんな風に、過ぎて行きました。

私は色々なことを思い出す。たくさんの友人ができた。ブライアン、サンゴン、シーサー、シン、インス、スービン、ステイーブン、ジョン…みんななつかしい。すごくオシャレなバーで飲んだこと、夏には若者であふれると言うヘウンデビーチに連れて行ってもらったこと、解剖学実習のとき私の班にきて仲良くなっていたのだが連絡ができず困っていたトンと偶然再会できたこと、インジェ大学では下の学年の生徒は上級生に対し、また全ての生徒は先生に向かって必ず一礼するという見習うべき礼儀があったこと、どれも今思うとすばらしい記憶です。

そして何より自分の力の無さを感じたこと。医学に関する知識にしろ、英語力にしろ。私自信は、いまの所は海外で医者をやっていくつもりはないけれど、海外の医学生が「いま」何を考えているか、肌で感じ取れたと思う。PBLはよくわからなくても、とりあえず夜はまた韓国の学生と交流。結局、世話人の石先生が言っていた「PBLよりも、こちらの学生との交流が大事」という言葉に収束する様なインジェ大学の一週間であった気がします。

そして康先生、このようなプログラムを提供して頂いて、本当にありがとうございました。ぜひ、部活の後輩たちにも宣伝しておこうと思います！



飲み会にて